



北海道大学 リスキリング講座 / 派遣をご検討の企業・人事ご担当者さま向け資料

会議室を出て、雪の森へ。 自社のGXを、問い直す3日間。

GX×ネイチャーポジティブで拓く、リ・スキリングプログラム 応用編（集中合宿）

2026年12月15日（火）～17日（木） 北海道大学 雨龍研究林 2泊3日・定員10名

01 なぜ、森で考えるのか
ねらいと、プログラム全体の位置づけ

02 3日間の流れ
フィールド、ワークショップ、成果物、会場

03 半年後に起きていたこと
受講者と派遣元企業への調査、受講者の声

04 社内でのご説明に
稟議のポイント、Q&A、開催概要・費用

なぜ、森で考えるのか

本資料は、応用編（集中合宿）への派遣をご検討いただく際に、社内でのご説明にお使いいただくためのものです。合宿のねらいと3日間の流れ、昨年度の受講者と派遣元企業に半年後に伺った結果、そして費用・日程をまとめています。

GX・ネイチャーポジティブの実務は、GHG排出量の算定や情報開示といった「いま」の対応に追われがちです。一方で、自然資本の変化は数十年から百年の単位で進みます。日々の業務の時間軸のまま自社の方針を描くと、足元の施策は揃っても、「自社はこの先どこへ向かうのか」という論点が整理されないままになります。

応用編は、雨龍研究林というフィールドに身を置き、研究者と対話しながら、森の“長い時間軸”を体で感じ取る場所から始まります。そのうえで、2080年の社会を起点に自社が提供できる価値を描き、現在へ逆算して行動計画に落とします。「森を見に行く研修」ではありません。**自社のGX・ネイチャーポジティブの「向かう先」を言葉にし、論点整理とアクションプランの形で持ち帰り、社内の議論を一段進めるための研修**です。中期計画やサステナビリティ方針、TNFD対応の前提となる「自社の向かう先」を、担当者自身の言葉で書き直す場になります。



① 現場で体感する

研究林を歩き、研究者の解説から森林の長期的な変化を理解し、体感する。

→ 学習記録



② 未来から逆算する

2080年の暮らしを描き、そこで自社が提供できる価値を言語化する。

→ 論点整理



③ 行動計画に落とす

変化の道筋（セオリー・オブ・チェンジ）を描き、アクションプランにまとめる。

→ アクションプラン

プログラム全体における位置づけ

STEP 1

アルムナイ説明会

10/20（火）東京＋オンライン・参加無料

STEP 2

基礎編ベーシック

オンデマンド・無料（GX先導研究センター）

STEP 3

基礎編アドバンス

対面＋オンデマンド（GX先導研究センター）

STEP 4 — 本資料

応用編 集中合宿

12/15～17・雨龍研究林・2泊3日

※応用編は基礎編を修了していなくても受講できます。昨年度の受講者から「基礎編を受講してから応用編に入れるとさらに良い」との声があり、基礎編ベーシック（10/20開講）の受講をおすすめします。

3日間の流れ

Day 1「森から問いを見つける」、Day 2「自社の課題につなげる」、Day 3「実装への一步を描く」の3段構成です。昨年度（2025年12月）の実施内容をもとに、今年度の流れを示します。



Day 1 歩くスキーで観測地へ



Day 2 手ノコで間伐



Day 2-3 ワークショップ

日程	時間帯	内容
Day 1 森から問いを見つける	午前	北海道大学 札幌キャンパス集合、送迎バスで雨龍研究林へ（昼食は車内）
	午後	ミニレクチャー：研究林の概要と、100年後の北国の森（森林生態学の研究者）
		フィールドワーク①：歩くスキーで森へ。天然林を歩き、研究者の解説から冬の森と季節の違いを知る
	夜	ナイトウォーク（星空・積雪は天候によります） 振り返り、研究者や参加者との対話
Day 2 自社の課題につなげる	午前	ミニ講義「持続可能な林業と森林管理」
		フィールドワーク②：手ノコを使った間伐体験、雪上車での移動。森を維持する時間と人の手を実感する
	午後	ワークショップ①：2080年の森の暮らしを想像し、そこで自社が提供できる価値を「課題・解決策・目指す世界」として言語化する ワークショップ②：生成AIを使ってアイデアをWebページの形にし、ロールプレイで反応を観察する
	夜	振り返り、異業種の参加者との対話
Day 3 実装への一步を描く	午前	ワークショップ③「インパクトから未来の道筋を描く」：自社の歩みを振り返り、2080年の理想（インパクト）から2030・2050・2070年の通過点を逆算して「変化の道筋（セオリー・オブ・チェンジ）」を描く 最終発表・レビュー
	午後	送迎バスで札幌へ（夕方、札幌キャンパス解散）

※昨年度の実施内容をもとにした構成です。今年度の時間割は申込時にご案内します。内容は天候等により変更となる場合があります。

3日間で手にする成果と、フィールド

成果物

学習記録	フィールドと対話で得た気づきを整理した記録
論点整理	自社のGX・ネイチャーポジティブの論点を、フレームに沿って構造化したもの
アクションプラン	2080年の理想から逆算した、自社で取り組む次の一歩
修了証	北海道大学より発行

持ち帰った成果物は、そのまま社内報告会の材料になります。昨年度も受講者が部内で報告会を開き、部署としてネイチャーポジティブの取り組みを進める起点になった例があります。

講師・運営

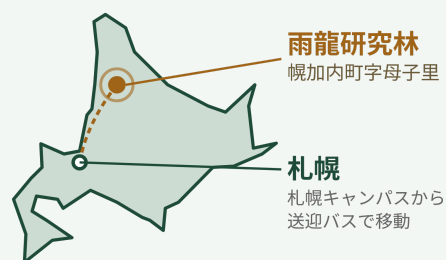
フィールド	北海道大学 雨龍研究林の研究者・技術職員（森林生態学・森林管理）
ワークショップ	未来洞察・バックカスティングの専門家
主催	北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター（FSC）

会場

北海道大学 雨龍研究林（北海道雨竜郡幌加内町字母子里）。宿泊は研究林の宿泊施設。札幌キャンパス集合・解散、送迎バスあり。防寒着・防寒靴は貸出があります。

北海道大学の研究林だからできること

雨龍研究林は、北海道大学が百年以上にわたり管理し、世代を越えて観測を続けてきた研究の現場です。冬季は一般の立ち入りがほとんどなく、雪上を歩いて観測地へ向かい、研究者と同じ目線で森を見ます。講師は森林生態学・森林管理の研究者と、現場を熟知した技術職員です。夜は研究者や異業種の参加者と寝食を共にしながら語り合い、修了後もアルムナイのネットワークとして続きます。歩くスキーや雪上の移動は初心者を中心に、スタッフが支援します。



手ノコでの間伐体験。森を維持する時間と人の手を実感する（昨年度）

昨年度の受講者に、半年後に起きていたこと

2025年12月の合宿に参加した企業の方6名全員に、合宿直後と、半年以上が経過した2026年8～9月の2回、アンケートを行いました（半年後は派遣元企業にも実施）。回答者数が限られるため、半年後の結果は割合ではなく人数で示します。

合宿直後（企業参加者6名全員が回答）

5.00／5

全体満足度（6名平均）
他者への推奨度も5.00

4.83／5

「森林生態系を長期視点で捉える
観点が増えた」（6名平均）

4.00／5

「自社・自分の活動に落とし込む
論点が整理できた」（6名平均）

2025年12月18～22日回答。プログラム別では、フィールドワーク・講義が5.00、Day 3ワークショップ4.83、Day 2ワークショップ4.67でした。

半年後（6名全員が回答・派遣元企業2社）

5名中5名

半年後の満足度が「非常に満足」
（設問回答者5名）

6名中4名

学んだ内容を現在の業務で活用
（「大いに」2名、「ある程度」2名）

2社中2社

派遣元企業が「実務に活用されて
いる」
「今後も派遣する意向あり」と回
答

2026年8～9月回答。発展講座への参加意向は、回答した5名全員が「受講したい」以上でした。

受講者に起きたこと

- 脱炭素施策を、地域課題や自然資本への影響の視点でも企画・評価するようになった
- TNFD・LCAを踏まえた社内資料のロジック作りに活用
- 新たな役割を付与された2名

組織に起きたこと

- 受講者が部内で報告会を開催し、部門メンバーに共有
- 自社保有林の管理部署で、ネイチャーポジティブの取り組みを進める学びの場に
- 派遣元企業2社とも継続派遣の意向

学んだ内容は、受講後にGX関連の業務に携わる方ほど活用されています（「あまり活用していない」2名は、異動でGX以外の担当になった、または普段GXに関わる業務ではない方でした）。派遣の際は、今後その役割を担う方をご選定ください。

受講者・派遣元企業の声

受講後に部内で報告会を開催し、部門メンバーに共有した。自社が保有する森林の管理を担う部署として、ネイチャーポジティブの取り組みを進めるための学びの場になった。

派遣元企業・課長級

脱炭素の施策を検討するとき、CO2削減効果や経済性だけでなく、地域の課題解決につながるか、自然資本に悪影響を与えていないかという視点で企画・評価するようになった。行政や研究機関との協議でも、より具体的な話ができるようになった。

エネルギー・経営企画・20代

長い時間軸で未来を考え、まだ存在しない姿をまず描き、現在へ逆算し、AIで仮説を素早く具体化して人と議論する。新しい仕事の型を実際に体験できた。

製造業・カーボンニュートラル担当・50代

足元から精度よく先を見ようとして現実の壁で止まりがちだったが、まず大きな理想（インパクト）を明確にし、そこに向けてロジックを展開する方法に感銘を受けた。バックキャストिंगのハードルが下がった。

合宿直後アンケート・企業参加者

昨年度の受講者が描いた「2080年に自社が提供する価値」（要約）

Day 2のワークショップで各受講者が自社の視点から作成した検討途中のアイデアです。IT・クラウドの例は本人の了承を得て原文に近い形で、他の3例は事務局の言葉で要約しています。

IT・クラウド 森のバイタルをクラウドと同期する

課題：森林管理の属人化（専門知識がないと管理できない）と専門員の不足。

解決策：AIとクラウドで森の管理の属人化を防ぎ、誰でも高度な管理ができるようにする。

目指す世界：知識やスキルのない人でも、森を豊かにする「地球の管理人」として暮らせる。

エネルギー 地域でつくる脱炭素エネルギー

課題：化石燃料への依存と、CO2を資源として循環させる仕組みの不足。

解決策：再生可能エネルギー由来の脱炭素ガスを、既存インフラで各家庭に供給する。

目指す世界：エネルギーの地産地消が当たり前になる。

インフラ 集落で分かち合う電力

課題：送電網に頼りきりでは地域は自立できず、個別の自給では安心が保てない。

解決策：地域の自然エネルギーを集落単位で融通する。

目指す世界：森を守ることが、そのまま暮らしの基盤になる。

金融 どこに住んでも安心できる見守り

課題：過疎・高齢化が進む地域で、予防と生活支援が断片化している。

解決策：健康データを統合し、一人ひとりに伴走する仕組みをつくる。

目指す世界：住む場所にかかわらず安心して暮らせる。

稟議に書ける3つのポイント

目的

GX・ネイチャーポジティブの体系的理解を、自社の論点整理と行動計画に落とし込む。

成果

学習記録・論点整理・アクションプランの3点と修了証を持ち帰り、社内報告会で共有する。

日程・費用

2泊3日(12/15～17、札幌集合・解散)。受講料30,000円＋実費1万円以内(宿泊・食事2泊6食)。往復旅費は別途。

社内でご説明いただく際のQ&A

昨年度、参加を見送られた企業の方へのヒアリングで最も多かった理由は「社内で説明しにくい」ことでした。よくいただく懸念と、本プログラムの考え方をまとめます。

Q. 「森を見に行く」だけでは、業務との関連が説明できない。

A. 森の観察は出発点で、ゴールは自社の論点整理とアクションプランです。昨年度の受講者は、脱炭素施策の企画・評価や、TNFD・LCAを踏まえた社内資料のロジック作りに活用しています。成果物は社内報告にそのまま使えます。

Q. 3日間の不在と費用に見合う効果を、どう説明すればよいか。

A. 理由は3つあります。①一般には入れない研究林で、長期観測を続ける研究者と直接対話できること。②成果が論点整理とアクションプランとして残り、半年後も6名中4名が業務で活用していたこと。③受講料30,000円＋実費1万円以内は、文部科学省事業の支援による今年度の価格で、実際の費用を大きく下回ること。昨年度の受講者からは「数十万円の価値がある」という感想も寄せられました。

Q. 平日3日間、北海道まで行く負担が大きい。

A. 3日間は、このプログラムの設計そのものです。①雨龍研究林は札幌から遠く離れた場所にあり、森の時間を体で感じるには2泊3日が最低限の長さであること。②日常業務から離れ、研究者や異業種の参加者と寝食を共にするからこそ、数十年単位の時間軸で考え、腰を据えて対話できること。③3日間のうちに論点整理とアクションプランまで形になり、基礎編はオンラインのため、まとまった時間が必要なのはこの3日間だけであること。宿泊・食事は実費に含まれます。札幌キャンパス集合・解散で、研究林との往復は送迎バスです。

Q. 雪の中を歩くと聞いたが、体力面が不安だ。

A. 歩くスキーや雪上の移動は初心者を前提にしており、研究林のスタッフが支援します。防寒着・防寒靴の貸出もあります。

Q. 何が持ち帰れるのか、事前にイメージできない。

A. 持ち帰るのは、学習記録・論点整理・アクションプランの3点です。昨年度の受講者がどんな論点を形にしたかは6ページの例を、受講後に何が変わったかは5～6ページの声をご覧ください。業種を問わず同じフレームで自社の論点を形にしています。右のQRコードから、昨年度の合宿の様子を短い動画(YouTube)でご覧いただけます。アルムナイ説明会(10/20)では、受講者のインタビュー動画と成果物も紹介します。



開催概要

日程	2026年12月15日(火)～17日(木) 2泊3日
会場	北海道大学 雨龍研究林(北海道雨竜郡幌加内町字母子里) 札幌キャンパス集合・解散、送迎バスあり
対象	GX・サステナビリティ推進、経営企画、新規事業、環境・森林資産の管理などに、今後1～2年携わる実務担当者・管理職の方にお勧めです。次年度にGX関連の役割を担う予定の方にも適しています。自社またはご自身の課題をお持ちください。職種・所属を問わず、関心をお持ちの方はどなたでもご参加いただけます。
定員	10名
受講料	30,000円 ＋実費1万円以内(宿泊・食事 2泊6食) ※札幌(集合・解散場所)までの往復旅費は各自でご負担ください
成果物	学習記録、論点整理、アクションプラン(修了証を発行します)
申込	合宿の申込方法・締切は、アルムナイ説明会でご案内します
アルムナイ説明会	2026年10月20日(火) 18:00～19:00 北海道大学 東京オフィス(東京駅 日本橋口 サピアタワー10階)／オンライン可・無料／申込締切 10月16日(金) 詳細： https://www.fsc.hokudai.ac.jp/20260924-alumni/

受講料について

本プログラムは、文部科学省「産学連携・スキリング・エコシステム構築事業」の支援を受けて実施しています。受講料30,000円は、この支援により、参加しやすい価格に設定しています。この価格は今年度の設定です。制度の状況により、次年度以降は見直すことがあります。

お問い合わせ

北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター(FSC) 志田・和田
gx-mirai@fsc.hokudai.ac.jp

本資料の声は、合宿直後(2025年12月)および2026年8～9月のアンケート回答を、個人・企業が特定されない形に要約したものです。「2080年に自社が提供する価値」は検討途中のアイデアで、本人の了承を得た1例を除き事務局の言葉で要約しています。本資料の最新版は、アルムナイ説明会ページ(<https://www.fsc.hokudai.ac.jp/20260924-alumni/>)からご覧いただけます。